総　合　討　論

＜小林＞

私は，東京学芸大学附属小学校で副校長をしております，小林と申します．午前中，長澤が実践報告をいたしましたが，その学校で働いております．今日は，「うちの園・学校の動物～教育課程と飼育～」というテーマを掲げております．各学校や幼稚園で飼われている動物を大いに自慢してもらおうということが一つありました．そのように飼われている学校では，飼育がしっかりと教育課程に位置づけられているのだろうということで，午前中からたくさんの実践発表をしていただきました．

そしてこれから，前に並ばれているパネリストの先生方からもいろいろなお話をしていただきながら，学校の教育活動に飼育をどう位置づけていったらいいのかということを討論していきたいと思います．今日の午前中の発表で，ある程度の結論は出ているのかもしれませんが，まだまだ話し足らないところがあると思いますので，そこをもう少し掘り下げていきたいと思います．

これから，パネリストの先生方のお考えを，自己紹介を兼ねながら，お話しいただきたいと思います．

＜丸山＞

西東京市立柳沢小学校校長の丸山と申します．よろしくお願いいたします．

実は私は昨年度初めてこの会に出席いたしました．私の学校では動物を飼育している状況もひどく，私自身も関心がなく，動物も嫌いだったこともあるのですが，中川先生をはじめとする西東京市の獣医師会の方々にお世話いただいて，最初はやっていただければいいのではないか位のことしか考えていませんでした．そこで，昨年のこの会に出席させていただいて，触発されたというか，このままではいけないという気持ちになりました．そして，改善の方向に向かわなくてはいけないとここで決心しまして，委員会活動の方法も工夫いたしました．しかし，これには限界があるということに気づき，思い切って学年飼育に切り替えました．ここで発表させていただくなどということは夢にも思っていなかったことですが，思った以上の成果が出て，本当にありがたく思っております．まだまだ課題はたくさんあり，これまでの実践も大変だったのですが，子どもたちの変容がやはりすばらしくて，やってよかったというのが正直な感想です．

＜石井＞

先ほど発表させていただきました，九段小学校の石井と申します．

今日私が発表した内容は場違いなものでした．私がお話をしたかったのは，各学校でやれることからやっていこう．ということなんです．今の学校はいろいろな事情がありますので，それを考えると，「やっぱりできません．」ということにとかく陥りやすくなりますので，「やれるところからやりましょう．」というのが私の言いたかった

ことです．
　その中で，最終的に今日の結論から言うと，学校を組織化して動かしていかないと絶対に成り立たないということです．ある先生がいるときにはうまくいくけれども，その先生がいなくなったら数年して終わりました．ということが結構あります．そうならないためにどうしたらよいかということを，是非ここで討論したいと思います．よろしくお願いいたします．
＜山本＞

　先ほど発表させていただきました，埼玉県久喜市学校教育課の山本です．
　行政の立場といたしましては，先生方がやりやすいような環境をいかに整えられるかということが役割ではないかと思っております．実践については，各学校の特性や状況に応じてやっていただければよろしいわけですが，今の世の中で，学校飼育動物の役割がとても大切であるということが，実践を見ながらだんだんわかってきました．そこで，微力ではありますが，どのような支援をすることで先生方が実践しやすくなるかということを，考え，実行していければよいと思っております．
＜伊藤＞
　一番最初に発表させていただきました，西東京市にございます私立の谷戸幼稚園の伊藤と申します．
　発表の中でも申し上げたように，命をどのように実感させられるかということ，命の教育を現場で実践しなければならないということで，始めたわけですが，本当に命を実感させることができるのだろうか，という疑問が，心の片隅にはありました．しかし，今日参加させていただいて，各小学校，中学校，高校と，現場でいろいろな体験をしながら，子どもたちは成長していくんだということがわかって，ほっといたしました．そこで，幼稚園の現場ではまず愛情を持ってかかわっていくことが大切なことだということを再確認して，

明日からの希望が出てきたと思っております．
　動物飼育にこの一年間力を入れてきてもう一つ思ったのは，図らずも，保育者の側が変わってきたということです．他者を丸ごと受け入れようとして，ウサギを抱いている保育者の姿に感動いたしました．我が身をもって他者を受け入れるということは，若い保育者にとって非常に大切なことだと思います．そんな意味でも，動物飼育をこれからもつづけていきたいと思いました．
＜中川＞
　今日はどうもありがとうございました．事前登録で280名の申し込みがありました．そして，高知県からも，九州からも，青森県や北海道からもご参加いただきました．そして，獣医師会員がだいたい100名近くおられます．ほかは教員関係です．
　先ほどは獣医師ばかりが質問していて，私も困ったなと聞いていましたが，獣医師からすれば，動物もかわいいし子どももかわいいと思っています．そして，これまで長年，支援しようと思っていてもどこから話を始めたらよいのかわからないということで，統制のとれたところがうらやましいと，たくさんの質問が出たのではないかと思います．
　しかし，私はまず獣医師が学校の言うことをよく聞くことが最初ではないかと思っております．たとえば，新宿の先生ですが，学校にはもう動物がいない．校長先生も飼いたくない．親御さんが鳥インフルエンザを怖がって反対する．どうしたらいいだろうということで，もうお帰りになりました．そんなとき，獣医師さんが相談を受けて，行政に相談したりしながら，一緒になって頭をひねって考えることが必要なのではないかと思います．往々にして，動物病院は忙しいから，なかなか手が回らないのではないかと考えがちですが，やはり，各地で皆さんが実践されている丁寧な対応が一番大きな力になるのではないかと思います．
　飼育はやはり大変だと先生方はおっしゃいます

が，最初は大変でもだんだん慣れてくるものです．私が担当している地域は完全に分業ができて保護者も手伝うようになっているので，少しも大変じゃないということを，秋口以降に言うようになります．私どもも，大変すぎる飼育はいけないと思いまして，笑い声が漏れる飼育にしたいと思っています．ですから，そんな飼育ができるように私たちは学校のお手伝いをしていきたいと考えています．動物病院は動物をたくさん預かっていますが，それを大変だと思っていたら，入院もさせられません．そこで，かなり簡便にきれいにする方法をいつも工夫していますので，そんな知恵を伝えてもらえればと思っております．

＜小林＞

ありがとうございました．

以上の５名のパネリストの方々と，討論を進めていこうと思います．学校で動物をきちんと飼育するということの価値は，これまでの発表で十分証明されているところですが，ただ，それがなかなか広まっていかないという現実があり，動物が学校からいなくなってしまうところも出てきているという現状があります．このことについて問題点があればそこを深く掘り下げていきたいと思います．今，順調に飼育しているところでも，何らかの問題点や障害があったのではないかと思いますので，そのようなところを少しお聞きしたいと思います．そのあと，それをどう克服していくか，という点を探りながら，会場の皆様からもご意見を伺い，一緒に話し合いを深めていけたらと考えています．

では最初に，飼育を行うことが教育的な意味があるということですが，飼育を始めた段階でいろいろな問題点があったのではないかと思いますので，そのようなところからお聞きしていきたいと思います．

本校でも，先ほど長澤からお話をさせていただきましたように，たくさんの動物がおりました．その考え方について，無藤先生のお話にもありましたが，われわれの知識不足，認識不足ということもありまして，いろいろ勉強させていただくことがありました．それで，少しずつ改善していったわけですが，動物がたくさんいすぎて手に追えない現実が少し前までありました．ほかの学校にもそのようなことがあったかどうかということをお聞きしたいわけですが，そのようなことが，久喜市の実態に合っているのではないかと思います．久喜市では，保護者や住民からの投書などもあったようですが，先生や子どもたちの意識などはどうだったかということについて，お聞きしたいと思います．山本先生お願いいたします．

＜山本＞

市民や議会から指摘されたわけですが，平成１３年に私が教育委員会に入りましたが，その前の平成８年，９年あたりから，ウサギが穴を掘って，その中でたくさん繁殖し，その穴が崩れてウサギが死んでしまうという現実が，いろいろな学校であったようです．そのようなことを直接教育委員会の方に言いにくいのかな，ということもありまして，学校の方からはそのような報告はなかったようです．しかし，そのようなことで一番苦しんでいたのは学校であり，子どもたちであったと思います．目の前で死んでいったりすることをそのままにするしかないということで，やはり認識が浅かったということが言えると思います．このことについては，教育委員会としても非常に反省したところでございます．

＜小林＞

では，教育現場である柳沢小学校でも，大変だった現状があったようですので，その辺のことについてお話しいただければと思います．

＜丸山＞

私はここにきて３年になります．７～８年くらい前までは，ウサギもニワトリもものすごくたくさんいて，とにかく飼育委員のなり手がないということでした．その後かなり改善が見られて，少し落ち着いたところで私が赴任いたしました．しかし，飼育小屋が遠い．時間もあまりない．先生方や子どもたちの意識も薄い．実際私も，飼育委員の子がかわいがってくれているな．くらいの認識しかありませんでした．

＜山本＞

一つ言い忘れたことがあります．久喜市では，飼育にふさわしくない，たとえばシャモとかクジャクとかの動物がたくさんいました．このことについて学校から教育委員会に相談しにくいのだろうなと思ったのですが，だんだん調べていくうちに，地域の方が飼えなくなってしまったので，学校で飼ってほしいと頼まれ，やむなくこのようなことになってしまったと言うことがありました．

<小林>

市民の方からのご意見はあったようなのですが，教員の側も悩んでいたという事実が今のお話からわかったのではないかと思います．このようなことをよくご覧になっていた中川先生いかがでしょうか．

<中川>

久喜市の場合は，平成11年だったでしょうか．私がホームページを作ったときに，「ぼくは飼育委員」という投書がありました．自分もウサギを飼っていてかわいがっているが，学校のウサギはかわいそうだ．先生方は命を大切にと言いながら，実際は大切にしてくれないという投書でした．それを，ここにいらしている川越の獣医師さんが見つけて，報告いただいて，このことを久喜市教育委員会などにもお話しして，うまく取り上げてくれたということがありました．

学校では，問題があるということに気がつかない方が多いと思います．子どもが訴えても，「気にすることはないと」と返事することの方が多いように思います．きっと誰かが取り上げてくれないと，子どもの心を傷つけてしまうのではないかと，山本先生はおっしゃったのではないかと思います．

それから，丸山先生のところは西東京市ですので，平成３年から獣医師と学校との連携があります．毎年獣医師は学校に伺っているのですが，学校側でうまくキャッチできなかったということで，ようやく去年から獣医師との連携が軌道に乗ったという感じがいたします．

<小林>

先生の側も知識がないために，問題意識が生まれていないというところが，今，紹介されたわけです．飼いやすい方法ということがあるわけですが，そのようなことを，いかにわれわれが研修していくかということについて，その次に大切になっていくことだと思いますが，現場でどのように飼育していくかということの研修を進めた，伊藤先生の幼稚園ではどうだったでしょうか．

<伊藤>

みんなで飼育していこうと思ったときには，朝世話をするときには水道が混むよね．とか，運動会の時などもちゃんと面倒見なくちゃならないよね．とか，いろいろと考えるところはありました．しかし，今日小学校の実践例をいろいろ聞いて，幼稚園てなんて平和なんだろう．と思いました．

幼稚園でも屋外で飼育しているところもありますが，うちはずっと室内飼育をしてきました．そのような飼い方をずっとしてきましたので，室内でモルモットを飼うということになったときにも，衛生的なことにも不安を持ちませんでした．やはり，一つ新しいことをしようとするときに，日々の生活が壊れるようなことをやってしまうと，先々続けていくことができないと思うので，まずは，無理のないところで，これだったらできるということから，始めたということがあります．

<小林>

園にいる動物をそのようにして飼っているということですが，九段小学校の方では，ほ乳類だけではなくて昆虫を飼育しているということですが，そのあたりで，飼育しやすさですとか逆に飼育が難しいところなどありましたらお願いします．

<石井>

うちの学校でも，ウサギやニワトリはいますが，教室の中で，子どもたちが深く関わりを持てる動物ということで，カブトムシを取り入れたということがあります．カブトムシは，ほ乳類と違って臭いや毛の問題もありませんので，とても飼育がしやすいということがあり，先ほどのウニの飼育事例のように，一人１匹ずつ飼育させています．ただ，一人一人に任せておけばよいかというと，そうではなくて，飼育に教師が相当かかわります．小学校ですから担任が当然指導していくわけですが，女性の先生など昆虫を飼った経験のない方もたくさんいます．しかし，そういう状況の中に否応なしに放り込まれていくわけです．ただ，われわれのような昆虫が好きな教師が支援しています．しかし，飼育を継続するポイントとなることは，やはり子どもたちなんですね．子どもたちは，カブトムシの動きなどに感動しますし，産まれた卵が幼虫になると，あっという間に大きくなったりして，そんな様子を見て，われわれ教師も感動します．そしてもう一つは，子どもだけではなくて，担任の先生にも，「あなたのカブトムシです」と渡します．そうすることで，先生もまた，飼育の感動を味わいます．このように，教師が子どもたちと一緒に飼育にかかわっていくことによって，継続した飼育ということが自然に行われているということだと思います．

<小林>

飼育の方法を教員は研修しなければなりませんが，その方法を行政の立場からいろいろ取り組まれていると思いますので，山本先生，その辺のところを少しお話しいただけますでしょうか．

<山本>

行政の立場からの飼育研修ということですが，ここには毎年，管理職に入ってもらうことにしています．市内14校小学校がありまして，６月から７月くらいに実施し，100名くらいの参加者があるわけですが，必ず管理職には入っていただきます．これは，飼育担当の先生一人には任せないと